DQ4ever

Horikado Nagayasu presents

目次

２：お転婆姫の露出修行 ..... - 3 -
　２－１：旅立ち ..... - 3 -
　２－２：特訓その１ ..... - 10 -
　２－３：お仕置き ..... - 20 -
　２－４：特訓その２ ..... - 31 -
　２－５：生贄 ..... - 36 -
４：ジプシーのレズ姉妹
５：裸の旅立ち
後書き

２：お転婆姫の露出修行

２－１：旅立ち

　蹴破った壁から屋根を伝って城を脱け出したマリームだったが、ラップの町に着く前に、追ってきたクリープとブライトにつかまってしまった。
「姫様、どこへ行かれるおつもりですか」
「まったく、姫様のじゃじゃ馬ぶりには爺も泣かされます。これからはお付きの侍女を増やして、常に監視させていただきますぞ」
　ちょっと気分転換のつもりで出てきただけだったけれど――侍女に監視されては二度と脱け出せないかもしれない。憧れていた武者修行の旅に出る、これが最後のチャンスだ。
「いやよ、帰らないわ。修行を積んで、この国一番の武術家を目指すのよ」
　言い争っているところへ、２匹のギリギリ

バッタが現われた。
「困った姫様ですね。それほどおっしゃるなら、腕前のほどを見せていただきましょうか」
　クリープとブライトは、マリームからはなれた。
「よく見てなさい」
　マリームの攻撃。ギリギリバッタＡにダメージを与えた。
　ギリギリバッタＡの攻撃。マリームはすばやくかわした。が、ローブの裾を踏んづけて転んでしまった。羽帽子がずれて、目をふさがれた。
　ギリギリバッタＢの攻撃。マリームはダメージを受けた。
　マリームは羽帽子を脱ぎ捨てて立ち上がった。マリームの攻撃。ギリギリバッタＡをたおした。
　ギリギリバッタＢの攻撃。マリームはダメージを受けた。
　マリームの攻撃。またローブの裾が邪魔を

して、回し蹴りは外れてしまった。
　マリームはさらに２ターンをかけてモンスターを片付けたが、ＨＰも半分になっていた。
「ザコ２匹を相手に５ターンですか。そんな腕で武者修行とはあきれましたね」
　クリープがため息をついた。
　いつもは気弱なクリープに馬鹿にされて、マリームは怒った。
「神官のあなたに、あれこれ言われる筋合いじゃないわ」
「神官でも、必要があれば闘います。すくなくとも、今の姫様よりは私のほうが強いですよ」
「まさか……」
「困った姫様ですね。身の程を教えてさしあげましょう。おっと、そのまえに――ホイ彡」
　マリームは回復した。
　クリープが現われた。クリープは棍棒を投げ捨てた。
「今の姫様には素手でじゅうぶん。かかって

らっしゃい」
　マリームはとまどっている。
「こなければ、こちらから行きますよ」
　クリープの攻撃。マリームは吹っ飛んだ。マリームは死んでしまった。
　……意識を取り戻したマリームは、自分が街道沿いの林の中にいることに気づいて驚いた。
「あれ、教会じゃない？」
「ザオーラルで甦らせてあげたのです」
「ええーっ！」
　そんな高レベルの魔法をクリープが使えるとは知らなかった。
「裏技を使えば、お城にいても経験値を積んでレベルを上げることはできます。ともかく、今の姫様のレベルでは、武者修行などとんでもない。さあ、お城へ戻りましょう。よろしければ、クリープが鍛えてさしあげます」
「いやよ。変な裏技なんか使いたくない。モンスターをたおして、正々堂々とレベルアッ

プします」
「わかりました。それほど姫様の決意が固いのでしたら、爺は止めません。ですが、お供はさせていただきますぞ」
「ブライト殿。姫様の気まぐれを真に受けてはいけません。絹のローブに羽帽子なんてチャラチャラした格好で、まともに闘えますか」
　マリームは絹のローブを脱ぎ捨てた。短い胴着とタイツだけの姿になった。
「これなら文句はないでしょ」
　クリープの不意打ち。
　マリームはすばやく身をかわして反撃のかまえをとった。
「なるほど。すこしは格好がついてきましたね。では、このクリープもお供しましょう」
　ただし闘いの手助けはしないと、クリープが言った。高レベルの仲間に助けてもらうようでは、武者修行の意味がない。
　３人はラップの町へ向かって歩き始めた。
　３匹のヌライムベスが現われた。

マリームは気負っていた。マリームの先制攻撃。ヌライムベスＡをたおした。

ヌライムベスＢの攻撃。マリームはすばやく身をかわした。が、後ろ向きにヌライムベスＣにぶつかった。

ヌライムベスＣはマリームを押しつぶした。

マリームはヌライムベスＣから這い出した。胴着が破れてしまった。右の乳房が剥き出しになった。

マリームの攻撃。会心の一撃。ヌライムベスＣをたおした。

ヌライムベスＢは、マリームのおっぱいぽろりに見とれている。

マリームの攻撃。会心の一撃。ヌライムベスＢをたおした。

「レベル１で会心の一撃を連発とはお見事。身体の動きを制約する防具は、姫様には邪魔になるだけですね」

「裸で闘うなんて、いやよ」

「話はあとまわしですぞ。闘いの始末をつけ

なされ」
「え……？」
　モンスターは光り物が好きだから、たいていコインや宝物を隠し持っている。それを回収するのも闘いのうちだとブライトに教えられた。あまり気は進まなかったが、マリームはたおしたモンスターの死骸を探った。全部で５Ｇのコインを手に入れた。持ち歩いていては闘いの邪魔になると言われて、コインはブライトに預けた。
　クリープにホイ彡をかけてもらったが、破れた服は元に戻らない。破れ目を脇の下で結び合わせて、胸を隠した。

２－２：特訓その１

　ラップの町に着くと、まず装備を強化した。マリームはわずかしかお金を持っていなかったし、クリープとブライトも同じだった。だが、ブライトは宮廷魔術師の身分証を持っていた。
「この娘はピンクといって、マリーム姫の身辺警護をおおせつかった侍女なのじゃが、武術の腕が未熟での。モンスター退治をかねて、特訓に連れ出したのじゃ。協力してくれぬか」
　武器屋も防具屋も喜んで協力してくれた。マリームは国民が忠実なことを素直に喜んだ。非協力的な国民がどんな罰を受けるかということまでは、考えが及ばなかった。
　クリープは銅の剣と革の鎧、ブライトは身かわしの服といばらの鞭を装備した。
「さて、この侍女の装備だが……」
　身体の動きを妨げない女性専用の防具はな

いかと、クリープがたずねた。身分の卑しい侍女でも装備できるものを――と、変な条件を付け加える。
「売り物ではございませんが、とっておきのアイテムがありますです」
　クリープの真意を察して、防具屋の主人は小さな箱を差し出した。
「これなら、そこの可愛いお嬢さんにぴったりですよ」
　箱の中には、乳房を隠すだけの胸当てと、飾りの多い細いベルト、透き通った生地の赤い布切れしか入っていなかった。マリームには、どういうふうに装備すればいいか分からなかった。
「親父、着替えを手伝ってやれ」
「そうですか。それでは、まず裸になっていただかなくては」
「なぜです？」
「踊り子の服は素肌に装備するのです」
「……」

箱の中の品をどう身に着けても、肌のほとんどが露出してしまう。それでも――ふつうには売っていない強力な防具だと、まだマリームは信じていた。
「着け方を教えてくれれば、自分でできます」
「どうせ、ここで着替えるんじゃ。遠慮せんでええ」
「身分の低い侍女の分際で、男に裸を見られるのが嫌とか我儘を言うつもりはないでしょうね」
マリームはクリープを睨みつけたが、それ以上の抗議はできなかった。マリーム姫がお忍びで町へ来ているなんて噂が流れたら、近衛兵の１個連隊がお迎えに来てしまう。
「分かりました」
マリームは胴着とタイツを脱いだ。店の主人にうながされて、下穿きも脱いだ。恥ずかしさで、顔も背中も赤く染まった。
店の主人はマリームの股間に赤い布を通した。細いベルトをヒップの上に回して、布を

折り返す。それから胸当てを乳房にあてがって
「これは困りました。この娘さんの胸は父親に似たのでしょう。カップがずり落ちます」
　豊満な踊り子に合わせて作られた胸当ては、まだ性熟しきっていないマリームの乳房には大きすぎた。
「では、こうしよう」
　クリープは前後に垂れている腰布の余りを切り取って胸に巻きつけた。
「このほうが、上下おそろいで見栄えがしますね」
　短くなった腰布がベルトから抜け落ちそうになるので、後ろ端をベルトに結びつけた。そうすると布がよじれて尻の谷間に食い込んでしまった。胸のほうも、布が一重では乳首が透けて見える。
「これなら、たいていのモンスターは見とれて攻撃を忘れるかもしれないですね」
　クリープは勝手なことを言いながら、元の

胸当てに着いていた飾り珠を胸の間に取り付けた。布が絞られて、乳房の上半分が露出した。

装備を終えたマリームは姿見の前に立たされた。思わずしゃがみこみそうになるのを、どうにか耐えた。たしかに身体は動かしやすい。武者修行に最適な防具を選んでもらったのだから、すこし（？）恥ずかしいくらいは我慢しようと、自分に言い聞かせた。

マリームは、まだクリープとブライトの忠誠を疑っていない。我儘放題の尻拭いをさせられてきた恨みを晴らしてやろうとふたりが企んでいるなどとは、思ってもいなかった。

「もうすこし、防御力を上げられないものかな。女戦士の中には、腕や腿に頑丈な装身具を着けて、それで敵の刃を受け止める者もいるそうだが」

それでしたら――と、また防具屋の主人が怪しげなアイテムを取り出した。厚い皮で作られたリングだった。それを二の腕と手首、

太腿と足首に巻いて留め金で締め付けた。首にも同じようなリングが取り付けられた。どのリングにも、防御の役にはたちそうもない小さな金属環が取り付けられている。黒い革に銀色のアクセントがついて、ちょっとお洒落かなと、マリームは能天気に思った。

マリームは武器を持たされなかった。

「強い武器でザコをたおしても修業になりませんからね」

マリームを一撃でたおし、ザオーラルまで使いこなすクリープの言葉は、上級者の適切なアドバイスに思えた。

装備が終わると、宿には泊まらずに町を出た。

「まだまだ私のＭＰは残っています。ピンクがレベルアップするまで、このまま頑張りましょう」

人前と３人だけのときとで使い分けようとすると、うっかり忘れることもある。これからは侍女ピンクとして扱わせていただくと、

クリープが言った。それもその通りだと、まだマリームは疑っていない。

ラップから先へ進もうとすると、出現するモンスターが強くなってきた。

土わらかしが２匹現われた。

マリームの攻撃。マリームは土わらかしＡに飛び蹴りをはなった。

「あっ……」

腰布がよじれて、クレバスに食い込んだ。マリームは空中で身悶えた。攻撃は外れた。

土わらかしＡは仲間を呼んだ。土わらかしＣが現われた。土わらかしＢは仲間を呼んだ……あっという間に、敵は８匹になった。

土わらかしＥの攻撃。マリームはすばやく身をかわした。土わらかしＦの攻撃。マリームはすばやく身をかわした。攻撃の回避率は、身かわしの服よりも高い。

土わらかしＧの攻撃。土わらかしＧは長い舌で、剥き出しになっているマリームの股間

を舐めた。
「きゃああっ！」
　マリームは凍りついた。マリームは総攻撃を受けた。瀕死のダメージを負った。
　マリームはクリープを振り返った。クリープは様子を見ている。ブライトは様子を見ている。
　マリームは攻撃をかわしながら、やっと１匹たおした。土わらかしはまた仲間を呼んで８匹になった。
　マリームは逃げ出した。しかし、クリープたちに回り込まれてしまった。
「ちょっと敵が強いからといって逃げ出すとは、卑怯者。お仕置きが必要ですね」
　ブライトはいばらの鞭を手に取った。ブライトの攻撃。
「いや、やめてえ！」
　マリームは身を守った。尻を鞭打たれた。ＨＰが１になった。
　土わらかしが追いついてきた。

「やれやれ。こんな所へ来てまで、じゃじゃ馬の尻拭いとはのう」
　ブライトはヒャッコイを唱えた。土わらかしは全滅した。
「これしきの経験値、儂らにはゴミじゃ。ピンクの手柄にしといてやろう。とっととGを掻き集めてこい」
　礼儀作法の教師が主君の姫君に向かって吐くはずもない暴言だったが、マリームは反発する気力すら失っていた。クリープに卑怯者と言われた屈辱、ブライトに鞭打たれたショック、初めて目の当たりにしたヒャッコイの威力。そのすべてが、マリームの気力を根こそぎにしていた。
　氷漬けになった土わらかしの死骸を探ってマリームはコインを回収し、ブライトに差し出した。
　マリームはレベルが上がった。ホイ彡を掛けてもらって体力が全快した。
「さて、つぎは何が出てきますかね」

まだ町へは戻らずに経験値稼ぎを続けさせるつもりだ。

マリームは、踊り子の服では闘いづらいと訴えた。

「それは、あなたが無駄な動きをするからです。本物の踊り子はその服を着て、どんなに激しく動いても、見苦しいことにはなりません――残念なことですけどね」

マリームの抗議は、またしてもクリープのもっともらしい説明で退けられた。

つぎに土わらかしが現われたときには、マリームは腰布の食い込みは無視して闘った。敵が仲間を呼ばなかったこともあって、モンスターをたおした。

レベルが４に上がったところで、やっと宿に泊まることになった。

２－３：お仕置き

ブライトは広いひとつの部屋を取った。身分の低い侍女が別の部屋をあてがわれるのは不自然だという。

この宿屋に風呂はない。部屋に備え付けの大きな桶に湯を張って、その中で身体を洗うのだ。マリームは、ふたりの男の目の前で身体を洗わなければならなかった。

「あなたのヌードなど、１０年以上も前から見飽きています。今さら恥ずかしがることもないでしょう」

乙女心の分からない朴念仁、とマリームは思った。乙女心を蹂躙しようと企むサディストとは、思わなかった。

しかたなく、ふたりに背を向けて踊り子の服を脱ぎ――マリームは愕然とした。腕輪や首輪が外せないのだ。

呪われたアイテムかと思ったが、そうでは

ないとブライトが説明した。
「自分では外せないというだけで、儂の持っている鍵を使えば外せますぞ」
　しかし、たとえ身体を洗うときでも不意打ちに備えて最低限の武器と防具を身につけているのが武術家のたしなみだと言われた。武器は――マリームの場合は素手だから問題ない。
　身体を洗い終えたマリームは、踊り子の服を装備せずにバスタオルを身体に巻きつけた。
「せっかく選んでくれた防具だけど、タイツと胴着だけのほうが、動きやすいと思うの。レベルが上がったから、すこしくらい守備力が減っても、もう大丈夫だし」
「会心の一撃を連発したのは、胴着が破れてからでしたね」
「それは、そうだけど……身体は動かしやすいけど、やっぱり恥ずかしいから」
「恥ずかしいとは？」
「だって……無駄な動きがあるからだってク

リープは言うでしょうけど……恥ずかしいところが見えてしまうのは……やっぱり、恥ずかしいから」
「恥ずかしいところ？」
「あの……」
　誘導されているとは気づかずに、マリームは失言してしまった。
「たとえば、ヘアーとか見えてしまうし」
「ああ、なるほど。下の毛が露出すると恥ずかしいのですね」
「やだ。そんな、はっきりと言わないで……」
「いや。闘いに関することです。はっきりさせなくては。下の毛が露出しないようにしたいと、姫様……おっと、ピンクは言うんだね」
「……そうです」
「それは簡単に解決できますぞ」
　待ってましたと、ブライトが言う。
「下の毛を剃ってしまえば、どんなに激しく動いても大丈夫ですぞ」
「違う……！」

「なるほど、そのとおりだ。さっそく剃ってしまいましょう」
　マリームの言葉を無視して、ふたりの会話が弾む。
「冗談じゃないわ。わたしが言いたいのは……」
　ブライトは道具袋から毒蛾のナイフを取り出した。ブライトの攻撃。マリームは痺れて動けなくなった。
「下の毛が見えるのが嫌だと言うから剃ってやろうとすれば、それも嫌だという。気まぐれにつき合わされるのは、もう結構じゃ」
　ブライトは道具袋から鎖を取り出した。仰向けに倒れているマリームの膝を折り曲げて足首と手首を鎖でつないだ。マリームは、開脚して腰を突き出した姿勢で拘束されてしまった。
「う、ぐ……」
　革リングは枷だったのだと、マリームは気づいた。と同時に、ふたりの意図にも気づか

ざるを得なかった。これまでのふたりの仕打ちが、はっきりと理解できた。
「おや、怖い顔をして、どうかしたかな？」
　ブライトは毒蛾のナイフをマリームの股間にあてがった。ブラウンがかった金色の柔毛が、はらはらと床に散った。マリームは恥毛を失った。
「終わったぞ。クリープ、キアソクでもかけてやれ」
　しかし、クリープはマリームの様子を見ている。
「この娘、敵意丸出しの形相ですよ。自由にしたら、何をするかわかりません」
「何をしたところで、儂らにかなうはずがなかろう」
「お城に戻りさえしなければ、そうですが」
　たとえ素っ裸でも城へ逃げ戻って、ふたりを厳罰に処してやる。死刑はかわいそうだから――遠国からハイレベルの魔法使いを招いて、永久マネスでヌライムにしてやる。マリ

ームは怒り狂っていた。
「城へ戻るよりクリープ様のおそばにいたいと思うようにしてやれば良いではないか」
「なるほど。試してみましょう」
　クリープは裸になった。
「な、なにをするつもりなの！」
　マリームは麻痺が解けた。しかし、動けなかった。
「女としての経験値をたっぷり注ぎ込んであげるのです」
　クリープは、マリームのクレバスを指で弄んだ。
「ここへ……」
　クリープの指が股間を穿った。
「いやっ……痛いっ……指を抜いてえ！」
「痛いですか。では、気持ちよくしてさしあげましょう」
　クリープは、クリトリスの包皮をめくった。ブライトは毒針を手に取った。
　ぷすうっ……会心の一撃。マリームの全身

が痙攣した。
「ザオーラル」
　マリームは生き返った。
「これくらいのダメージはホイ彡でじゅうぶんに回復しますね。しかし……ベホイ彡」
　マリームは全快した。あり余った回復パワーがマリームの体内を駆け巡って、あらゆるところを充血させた。
「あうう……」
「気持ちいいでしょう。もっと良くしてあげますよ」
　クリープはマリームを貫いた。マリームは処女を失った。
「もう、許して。お城へ帰して。何も言わないから……」
　マリームは鎖をほどかれた。しかし、うつ伏せにされて、また鎖をつながれた。
「城へ帰りたくなくなるほど気持ちよくしてあげますぞ」
　ブライトは、マリームのアヌスを犯そうと

した。しかし、勃たなかった。
「ええい、歳はとりたくないものじゃ。ベクトル！」
　ブライトのペニスが硬くなった。ブライトは、マリームを後ろから貫いた。
　いきなり二つの処女を奪われて、マリームは呆然としていた。高いプライドは、泣き叫ぶことをみずからに許さなかった。しかし、そのプライドを打ち砕かれては、どうしていいか分からない。ブライトの蹂躙は苦痛と屈辱しか感じなかったが、クリープの侵入には、快感が無かったといえば嘘になる。だが、すべてを投げ出してクリープに服従してもいいとまでは思わない。
　マリームの呆けた表情から、そういった心の動きをブライトはすべて読み取っていた。
「これだけ優しくしてやっても、まだ分からんようだな。飴と鞭の、つぎは鞭の出番じゃな」
　マリームは鎖をほどかれた。革の枷だけを

着けた全裸で、宿の裏庭へ引き出された。２本の木のあいだに、マリームは大の字に吊るされた。
「妙な事を口走られてもまずいぞ。しばらく黙っていてもらおう」
　ブライトはマリームのタイツを道具袋から取り出した。丸めて口に突っ込み、余った長さで頬を縛った。
　宿の主人や泊り客が、異変に気づいて裏庭へ出てきた。
「夜分にお騒がせして申し訳ありません」
　素っ裸で縛られている少女の前で、クリープが穏やかに挨拶をする。
「この侍女は、武術の修行をいやがって逃げようとしました。根性を叩き直してやるところです。興味のある方は、遠慮なくご見物ください」
　観察力の鋭い者は、少女の股間を伝う赤い筋と白濁に気づいたかもしれない。だが、宮廷魔術師と神官の威光に逆らおうとする者は

いなかった。むしろ――滅多に見られない見世物を見逃すまいと、眠気など吹っ飛ばして３人を遠巻きにするのだった。
「私たちは、おまえに反省など求めはしない。私たちに逆らえばどうなるか、身をもって思い知ってほしいだけだ」
　クリープがさがると、ブライトがいばらのむちを構えた。
　ビシッ！
　マリームの幼い乳房が跳ね踊った。
「ううっ！」
　２撃目ははずれた――のではなく、乳首だけを正確に打った。
「んぎあっ！」
　厳重に封印されたはずの唇から悲鳴がほとばしった。
「つぎは、ちょっと厳しいぞ」
　ブライトは、鞭を下手に構えた。跳ね上がった鞭は、マリームの股間を襲った。
「んがうううう！」

マリームは瀕死の重傷を負った。
「ホイ彡」
マリームは回復した。いばらの鞭が、今度は脇腹を抉る。
――折檻は、クリープのＭＰが尽きるまで続いた。
クリープとブライトは部屋へ引き上げ、マリームは瀕死で宙吊りにされたまま朝を迎えさせられた。
夜が明けるとホイ彡をかけられ、踊り子の服を与えられた。ほんものの踊り子でも恥ずかしがるほどに改造されたコスチュームを身にまとい、マリームはふたりのサディストを満足させるだけの武者修行に引き立てられるのだった。

２－４：特訓その２

マリームはラップの町からペテンの村へ通じる街道を歩いている。装備は踊り子の服(ふんどしバージョン)と革の拘束具だけだった。

耳飛びウサギが３匹現われた。

「空中戦になりますね。今のピンクなら、キックだけでじゅうぶんでしょう」

姫様お付きの侍女の特訓という触れ込みなので、マリームはピンクという偽名で呼ばれている。

ブライトは皮袋から短い鎖を取り出した。マリームの首枷に鎖を取り付け、両腕を背中にねじ上げて手首の枷につないだ。

「思いきり高く飛ばないと届きませんぞ」

マリームはひとりで耳飛びウサギに向き合った。

「キキッ！」

耳飛びウサギＡの攻撃。マリームは身をか

がめて攻撃をかわした。

マリームの攻撃。マリームは飛び蹴りをはなった。しかし、飛んでいる耳飛びウサギには届かなかった。

「もっと高く飛べと言ったではないか」

ブライトの攻撃。いばらの鞭でマリームの肩を打った。マリームは口惜しさに唇を噛み締めた。

耳飛びウサギBの攻撃。マリームは正面から攻撃を受け止めた。膝蹴りで反撃。耳飛びウサギBを倒した。

耳飛びウサギCの攻撃。マリームはジャンプしながら脚を真上に蹴った。耳飛びウサギCを倒した。しかし、体勢を崩して肩から着地した。

「痛っ……」

マリームはダメージを受けた。マリームは立ち上がった。激しい動きで踊り子の服は腰布がほどけていた。

耳飛びウサギAは飛ぶのも忘れて、マリー

ムの股間に見とれている。ヘアを剃られているので、ピンク色の割れ目が丸見えだった。マリームの攻撃。耳飛びウサギＡは、幸せそうな表情で踵落しを食らって昇天した。

　マリームは、たおしたモンスターの死骸を足で探った。コインを見つけた。マリームは跪いて、口でコインを集めた。後方でひかえているブライトのところへ行って、ブライトが手を差し出すのをじっと待った。

「ザコを相手にもたつきおって。まあ、たいしてダメージを食らわなかったから、及第点ということにしといてやろう」

　ブライトは、マリームの剥き出しの股間を撫で上げた。マリームはクリトリスを摘まれて、うっとりした表情を作った。ちょっとでも嫌悪を顔に出すと、いばらの鞭でしごき上げられるのだった。

　マリームは、ブライトの差し出した手にコインを吐き出した。

「これくらいなら、まだホイ彡はいりません

ね。服だけ直しておきましょう」
「闘いのたびに服装が乱れるのは、ピンクの動きに無駄があるからじゃが、おぬしの直し方もいい加減かもしれんの、クリープ」
　マリームの鎖をほどきながら、ブライトがあおった。
「では、ほどけないようにしましょう」
　クリープは腰布をねじって紐のようにした。紐になった腰布をマリームの股間に食い込ませて、強く引き絞った。
「あっ……いや」
　マリームはよわよわしく抗議したが、それ以上はさからわず、クリープにされるがままになっていた。
「どうも手ごたえが悪い」
　クリープは腰布をゆるめて、大きな結び玉を作った。結び玉をクレバスに埋め込んで、また引き絞った。
「あ、くう……」
　踊り子の服は、エッチなフンドシになって

しまった。
「ありがとうございます、クリープ様」
　マリームは仕込まれた台詞を口にした。家来の迷惑など考えずに好き放題にあばれていたじゃじゃ馬姫の面影は、もはやなかった。毎晩ふたりに犯され、宿の裏庭に裸で吊るされて折檻されるうちに、マリームは従順な牝奴隷に作り変えられていた。犯されながら快感にのたうち、宿泊客に裸身を見られて羞恥に身悶えながらも股間を濡らしてしまうようになったのだから、マゾ牝奴隷といったほうが正確かもしれない。
　だから――埋め込まれた結び玉に股間をえぐられながら歩きだすと、マリームはいつしか本物の恍惚の表情を浮かべていたのだった。

２－５：生贄

　ペテンの村は騒然としていた。村長に事情をたずねると、ひとり娘のナターシャをモンスターへの生贄に差し出さねばならないという。
「おお、どこかに怪物を退治してくれるような強いお方がおらぬものか」
　クリープとブライトは、顔を見合わせて冷酷な笑みを浮かべた。
「ピンクの出番だな。ナターシャという娘と年格好も似ている。身代わりになってあげなさい」
　マリームは緊張した。ザコ敵が相手では、後ろ手に縛られたり足首を鎖でつながれて歩幅を制限されていても、楽勝のレベルになっている。ひさしぶりに全力で闘える。マゾ牝奴隷に堕とされていても、闘争本能までは失っていなかった。

マリームは生贄を運ぶ籠の前へ連れて行かれた。
「たいへんに申し訳のないことですが、素っ裸になってください」
村長はていねいな口調でとんでもないことを言った。
「なぜ、裸にならなければいけないの？」
「怪物から、生贄の扱い方を指示されているのです」
村長は巻物を取り出してマリームたちに見せた。モンスターの字は読めなかったが、添えられているへたくそな絵は、見間違えようがなかった。
全裸の女が高手小手に縛られて、胸も縄で絞られていた。そして、胡坐に組んだ足首に巻いた縄が首に結ばれていた。
「使う縄も送られてきています」
こんなふうに縛られては、まったく身動きできなくなる。
「これは困った」

さすがに、ブライトも頭をかかえた。が、すぐに迷案を考えついた。
「このモンスターの目的は明白じゃな。ならば、罠を仕掛けよう」
マリームは、モンスターの要求どおりに縛られることになった。
「手加減して疑われてはまずいですからね」
クリープは、ぐいぐい縄を締めあげた。手首が肩まで引き上げられ、この数日で膨らみを増してきた乳房が容赦なく絞りあげられる。絵に指示されているよりも深く身体を折り曲げられて、胡坐縛りにされた。
「罠というのは、これじゃよ」
ブライトは毒針を取り出した。マリームの肩をつかんで仰向けに倒した。クレバスが天に向かって晒された。
「これを、ここに仕込んでおけば――どれだけＨＰがあろうとイチコロじゃ」
「そんな無茶な……！」
マリームは必死に抗議した。

「毒針なんて、ちゃんと使いこなせる者でも急所を直撃できる確率は１／８よ。こんな作戦、失敗するに決まってる」
「急所を直撃するよう、うまく腰を使えばよかろう。儂らが仕込んでやったはずだぞ」
　マリームは腰をゆすって逃れようとしたが、厳しく縛られているのでほとんど動けなかった。
「今から腰を使う練習までしておくつもりかの。感心感心」
　毒針はクレバスの奥深くへ挿入されてしまった。
　マリームは籠の中へ座らされた。
「では、１／８の幸運を祈って。神のご加護がありますように」
　神父はマリームの乳首とクリトリスを順番にひねって十字を切った。
「あふ……ん」
　乱暴に扱われると感じてしまう自分を、マリームは惨めに思った。

緊縛されて籠に閉じ込められたまま、マリームは森の奥深くに放置された。

夜が更けて、モンスターが姿を現わした。

カメオレンマンが現われた。暴れ凧犬が現われた。

「なんで、３匹も……！」

マリームは絶望の悲鳴をあげた。カメオレンマンをうまく毒針で倒せても、暴れ凧犬に食い殺されてしまう。

（でも、まさか……）

城でふたりに迷惑をかけどおしだった罪滅ぼしというだけでなく、ふたりのサディストの慰み物にされていると、マリームははっきり自覚している。それでも、まさか見殺しにされることはないだろう。ふたりの気配は感じないけれど、きっと近くに潜んでいるはずだと信じていた。信じようとしていた。

武者修行に名を借りて嬲られながら、マリームはふたりに反抗する気力を失っている。しかし、城へ帰れば……スキャンダルをおそ

れて、ふたりを暗殺しようと考えるようになるかもしれない。王女としては当然だ。クリープとブライトも、同じように考えただろう。ならば、マリームが亡き者になってしまえば……暴れ凧犬に食べつくされてしまえば、ザオソクだって役に立たない。
「いやあっ！　助けて！」
　マリームは生まれて初めて、底なしの恐怖を味わった。
「怖がることはない。取って食ったりはしないぞ」
　カメオレンマンは籠の中のマリームを抱き上げた。
「それどころか、お嫁さんにしてうんと可愛がってあげよう。俺と、この２匹のワンちゃんのお嫁さんだ」
　マリームは草の上に座らされた。
「それにしても、念入りに縛ったものだな。あの村長は呆れた変態だ」
「そうしろって、あなたが指図したんじゃな

いの。へたくそな絵まで付けて」
「俺が？　そんなことはしていないぞ」
　マリームは混乱した。ふたりが村長と示し合わせて（村長を脅して？）マリームを騙したのだろうか。
　マリームは必死に考えた。モンスターたちには殺意がなさそうだった。おとなしく犯されてやれば、生命は助かる。隠れ家へ連れて行かれるにしても、隙を見て逃げ出せる。しかし、毒針を使えば……
「待って。これは罠なの」
　マリームはカメオレンマンに毒針の存在を教えた。カメオレンマンはマリームのクレバスを用心深く探った。毒針を見つけて引き出した。
「よく教えてくれた。感謝するぞ」
　そのときだった。
　クリープが現われた。ブライトが現われた。村人たちが現われた。
「呆れましたね。モンスターに命乞いして、

味方を裏切るなんて」
「これは、ちょっとやそっとの折檻で済ますわけにはいかんぞ。ヒャッコイ」
　モンスターは一掃された。

　村人たちは、縛られたままのマリームを籠に押し込んで村へ連れ戻した。村の広場にかがり火が焚かれて、マリームの裁判が始まった。
「モンスターの油断を見計らって奇襲しようという作戦が失敗してしまった。裏切り者は死刑だ」
　村長の言葉に、村人が賛成した。
「最初からブライトのヒャッコイを使えば、簡単だったじゃない」
　不自由な姿勢で引き据えられたマリームは反論したが、退けられた。ブライトもクリープも通りすがりの旅人だ。村人が自分たちの力でモンスターを退治してレベルアップしなければ、つぎに襲われたとき全滅してしまう。

「村長を説得して、自分の村は自分たちで守ると決心させたのに、ピンクはそれを台無しにしたのです」
　なんだか話の順序が違う気もしたが、マリームにはモンスターに命乞いをしたという負い目があった。反論できなかった。
「村の皆が怒るのはもっともじゃが、この娘は城で雇っておる。ここで殺させるわけにもいかん」
　ブライトがマリームの助命を求めた。マリームは意外に思った。
「この娘は、モンスターの花嫁になろうとした。いっそ、望みをかなえてやってはどうかな。ここには暴れ凧犬などおらぬが……」
　村でいちばん大きな犬が連れてこられた。
「いや、いやようっ！」
　マリームは泣き喚いた。しかし、許してもらえなかった。マリームは前に倒された。胡坐を組んだ姿のまま肩を地面に押しつけられ、尻が高く持ち上がった。犬の鼻先でクレバス

が全開になった。

マリームは犬に犯された。

それから、いつものように全裸で大の字に吊るされた。ブライトのいばらの鞭にかわって、村人たちの棍棒で折檻された。ベホイ彡でも間に合わず、クリープは何度かザオーラルまで使わねばならなかった。

翌日――マリームに絹のローブと羽帽子が返された。城へ帰るのだと言われても、マリームはさからわなかった。

事情がどうだったにしても、モンスターに命乞いをしたという屈辱は、マリームのプライドを根底から崩壊させていた。家来に辱められたことは、彼らが邪悪だったからであり、自分が未熟だったからだ。しかし、モンスターに命乞いをして媚を売ろうとまでしたのは――自分の卑劣さがすべてなのだ。

城へ戻ってからも、マリームはふたりに口止めしようとさえしなかった。口止めをする

には、まずその事実を自分が認めなければならない。今際のきわにひと言でも口走られる危険を考えると、暗殺など思いもよらなかった。

マリームは二度と冒険の旅に出ようなどとは考えず、じゃじゃ馬ぶりもなりをひそめて、王に命じられるままに花嫁修業に精を出すようになった。

クリープとブライトが再びマリームを辱めることはなかったが、ＥＤになった王のためにスリスリの蜜を求めて旅立ったときは、ほっとしたものだった。

スリスリの蜜を持ち帰ったふたりは王の命令で、世界を覆わんとする暗雲の根源を突き止めるべく他国へ旅立つことになるが、それは別の物語となる。

［５章に続……きません］